

§はじめに§

これまで教職員の協力を得て、積極的に学生に直結する教育環境の充実、向上に取り組んで来た。今回、自己点検・評価活動として、資金的支援、学生生活支援、保健、学生相談での支援項目のデータを作成した。本学は学生のニーズ、期待に充分応えきれているか、現在おかれている現状を把握し、学内外の教育環境をより充実し、向上させるために何が必要か洞察し、まず認識し、学生が主役の大学とすべく取り組みを検証した。

§現状報告・評価§

<目 標>

少子高齢化とグローバル化の時代を迎え、産業構造や雇用形態なども大きく変化している現在、学生がより能力を発揮でき、より満足のできる職業選択やより充実した学生生活が送れるように支援していくことは、今日の大学に課せられた使命でもある。そして、従来にもましてきめ細かい多様な指導が必要とされている。

本学としては、できるだけ多くの有為な人材を育成して社会に送り出すために、以下の4つを目標とする「学生支援の目標」を掲げていきたい。

学生生活の充実向上に向け、修学・研究に専念し得る健全な学生生活の環境を整えることへの支援

将来の目的意識を明確に持ち、社会的・経済的に自立することへの支援

大学教育のもつ社会的使命を、実社会で遺憾なく発揮し役立てることへの支援

広く社会や文化の発展に貢献し得る人材を育成することへの支援

である。

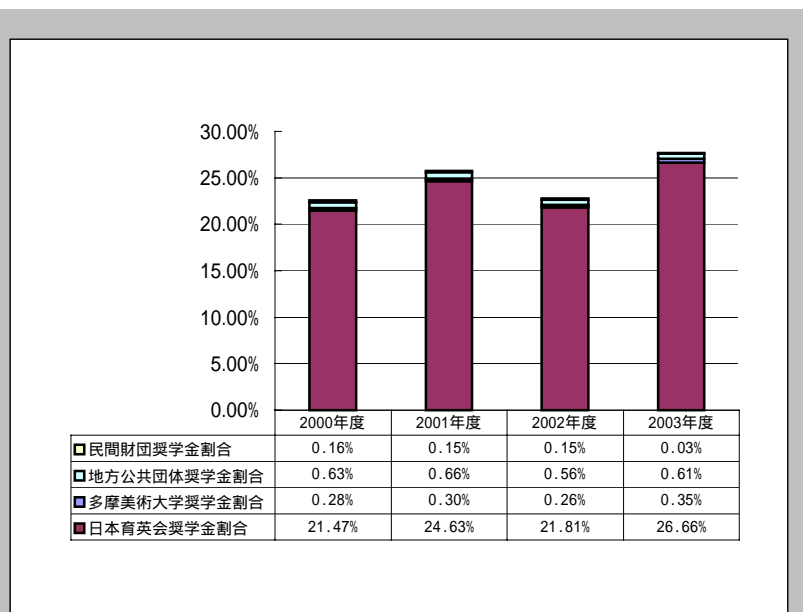
さらに、本学の持つ特性や独自性を活かすことに加え、社会の変化や新たな要請に対応し得る柔軟な組織を構築していく必要がある。ここに、本学オリジナルの支援体制が求められる由縁がある。

学生生活とは、その限られた時間の中でさまざまなものと遭遇しながら、おおよその人生設計と将来の目標を確立させる期間でもある。社会の入口に立つ重要な時期に、これらの支援を通じて、自らの学生生活が豊かで実りあるものとなるように、また将来へ向けての人生観や職業観を醸成することができるように“大学として手を差し伸べていくこと”が、これからの本学に課せられた課題であるとも言えよう。

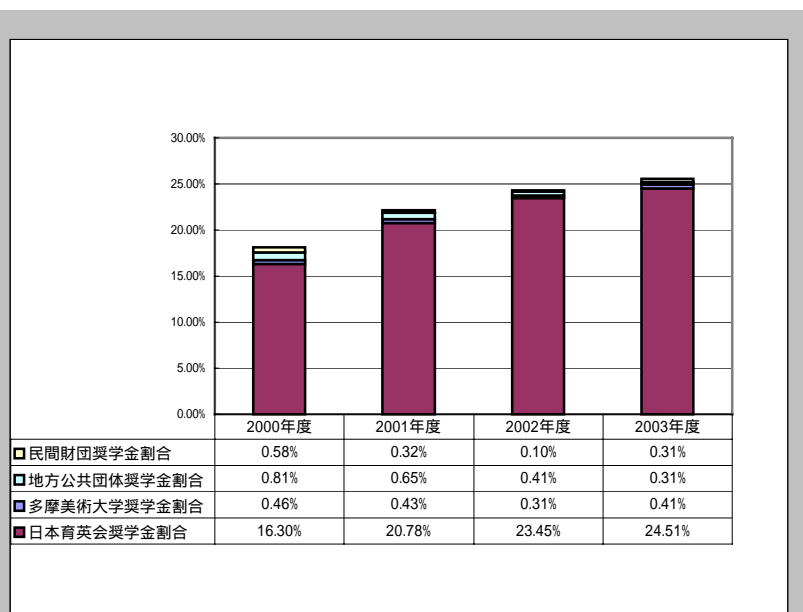
1. 資金的支援（奨学金）

< 現状報告・評価 >

奨学金の受給状況は、以下の通りである。



奨学金受給率（美術学部）(図 -1)



奨学金受給率（造形表現学部学部）(図 -2)

学 部	美術学部				造形表現学部			
	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
多摩美術大学奨学金	9	10	9	12	4	4	3	4
日本育英会奨学金	678	825	741	919	141	192	227	239
地方公共団体奨学金	20	22	19	21	7	6	4	3
民間財団奨学金	5	5	5	1	5	3	1	3
全奨学金受給者数	712	862	774	953	157	205	235	249
在籍者数（除く留学生）	3158	3349	3398	3447	865	924	968	975
奨学金受給率	22.55%	25.74%	22.78%	27.65%	18.15%	22.19%	24.28%	25.54%
大学院	大学院博士前期				大学院博士後期			
	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
多摩美術大学奨学金	3	5	6	5		0	1	0
日本育英会奨学金	73	66	51	76		2	3	1
地方公共団体奨学金	0	0	0	0		0	0	0
民間財団奨学金	3	4	4	4		0	0	0
全奨学金受給者数	79	75	61	85		2	4	1
在籍者数（除く留学生）	185	183	191	212		2	3	3
奨学金受給率	42.70%	40.98%	31.94%	40.09%		100.00%	133.33%	33.33%

奨学金受給者内訳（表 -1）

多摩美術大学奨学金

出願資格は本学2年生以上の学生であること。学業成績、人物とも優秀である者。経済的理由で学業の継続が困難な者。学部、大学院あわせて20名を毎年度始めに募集する。給付額は年間20万円で、年2回に分けて給付。当該年度1年限りとするが、次年度以降の再出願を妨げない。

多摩美術大学奨学金については、2004年度より大幅に制度が変更となっている（募集人数100名、年間40万円）。

日本育英会奨学金

国が行う奨学金制度で、現在本学でもっとも多くこの制度を利用している。大学は出願者の学業成績、家計状況、人物、健康などについて審査を行い、選考のうえ日本育英会（2004年度より「日本学生支援機構」に組織変更）に推薦している。また、高等学校在籍中に在籍高校を通じて出願し、推薦を受け、大学進学後に日本育英会の奨学金貸与を受ける方法（予約採用制度）もある。

地方自治体奨学金

学生の出身地の都道府県、区市町村が行う奨学金制度。本人または保証人が対象地域に在住していることが出願の必須条件になる。大学に募集用紙が届く場合は、掲示によっ

て学生へ周知している。

民間財団奨学金

企業や美術関係者による奨学金制度がある。大学に募集要項が届く場合は、掲示によって学生に周知している。手続き上、大学によるとりまとめが必要な場合は、学生課が窓口になることが多い。

< 課 題 >

国内の経済状態も芳しくないことから、学生を取り巻く資金的状況は楽観できない。貴重な制作時間を、学費や生活費を手に入れるためのアルバイトで費やすことがないよう、今後も大学として、より資金が必要な学生に奨学金が行き渡る努力を怠ってはならない。

また、日本育英会をはじめとして各奨学金の採用者が増加する傾向にある。採用された奨学生に対して、学業や学費の納入状況を把握し、奨学生としてふさわしい生活を送るよう指導することも重要である。

また、多摩美術大学奨学金は、2004年度より採用枠、金額ともに増加した。しかし大学として給付型奨学金の充実をはかっていきたい。

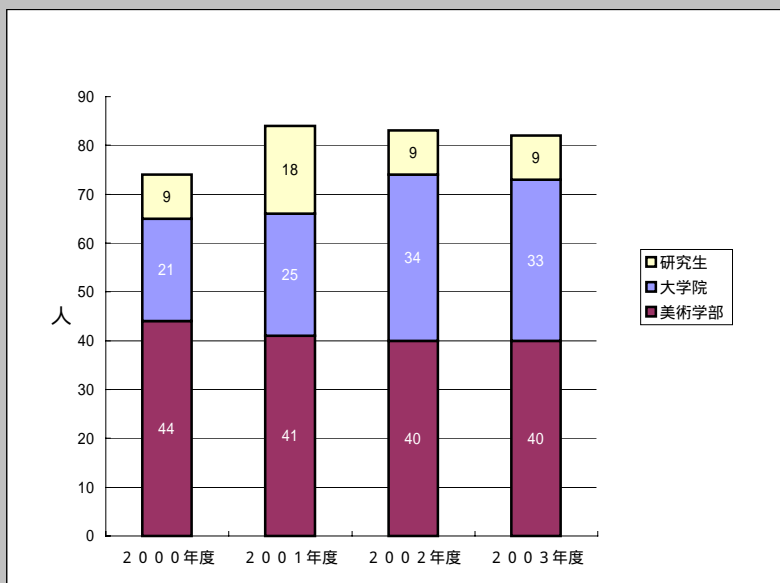
奨学金とあわせて、良質なアルバイトの確保も今後の課題となる。現在は学外からのアルバイト求人を学生課内で掲示しているが、学業に支障のないアルバイト（学内施設でのアルバイト等）についても学生に斡旋し、経済的にも安心した大学生活が送れるようにすることも学生支援の一つではないだろうか。

2 . 留学生支援について

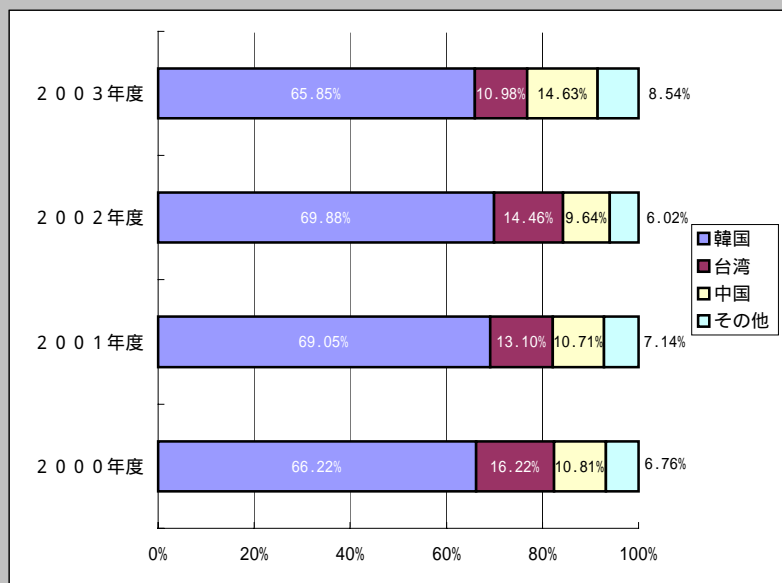
< 現状報告・評価 >

本学の留学生数について、2001年度に大幅に増加したが、その後は大きな変化が見られない。2001年度からの人数増は、研究生としての外国人留学生の受け入れ増加、その後大学院博士後期課程（博士課程）の開設等による（図 -3 参照）。

外国人留学生の奨学金については、応募資格が細かく定められている。また、奨学金等の経済的支援だけでなく、住宅機関保証や医療費補助といった支援も必要になり、例年多くの学生がその制度を利用している。



外国人留学生数の推移 (図 -3)



外国人留学生国籍割合 (図 -4)

2000-2003 外国人留学生データ	2000 年度					2001 年度				
	韓国	台湾	中国	他	合計	韓国	台湾	中国	他	合計
在籍数(5月1日現在)	49	12	8	5	74	58	11	9	6	84
(内訳) 美術学部	30	10	2	2	44	29	8	2	2	41
大学院	14	2	4	1	21	17	3	3	2	25
研究生	5	0	2	2	9	12	0	4	2	18
(以下内数)										
国費留学生(5月1日現在)	1	0	1	2	4	0	0	1	3	4
外国政府・交換留学生(5月1日現在)	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
私費留学生(5月1日現在)	48	12	7	2	69	58	11	8	2	79
国費留学生国内採用採用者	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
私費留学生学習奨励費採用者	8	3	1	2	14	13	3	1	1	18
私費留学生授業料減免採用者	40	12	5	2	59	41	11	4	1	57
地方自治体奨学金採用者	5	2	0	0	7	5	1	1	0	7
民間財団・その他奨学金採用者	10	3	0	1	14	9	0	0	1	10
住居機関保証利用者	3	0	0	0	3	2	0	0	0	2
医療費補助利用者申請件数	5	10	11	5	31	10	8	6	6	30
	2002 年度					2003 年度				
	韓国	台湾	中国	他	合計	韓国	台湾	中国	他	合計
在籍数(5月1日現在)	58	12	8	5	83	54	9	12	7	82
(内訳) 美術学部	26	10	3	1	40	27	7	5	1	40
大学院	24	2	4	4	34	22	2	5	4	33
研究生	8	0	1	0	9	5	0	2	2	9
(以下内数)										
国費留学生(5月1日現在)	0	0	1	4	5	1	0	1	6	8
外国政府・交換留学生(5月1日現在)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
私費留学生(5月1日現在)	58	12	7	1	78	53	9	11	1	74
国費留学生国内採用採用者	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
私費留学生学習奨励費採用者	14	2	1	1	18	9	2	2	0	13
私費留学生授業料減免採用者	49	12	6	1	68	45	8	9	1	63
地方自治体奨学金採用者	1	2	0	0	3	2	0	0	0	2
民間財団・その他奨学金採用者	5	0	1	1	7	6	2	0	0	8
住居機関保証利用者	7	0	0	2	9	13	0	1	2	16
医療費補助利用者申請件数	13	12	2	11	38	16	6	4	8	34

外国人留学生詳細データ(表 -2)

< 課 題 >

留学生数の増加に伴い、様々な経歴を持つ留学生が入学するようになって来た。今までは、日本語学習のために、日本で何年か生活した後で入学する学生がほとんどであったが、現在では出身国で日本語を学習し、日本の高等学校レベルの学校を卒業してすぐに入学する学生も増えて来ている。今後は、今まで力を入れてきた奨学金等の経済的支援だけでなく、生活面での支援についても力を入れる必要がある。

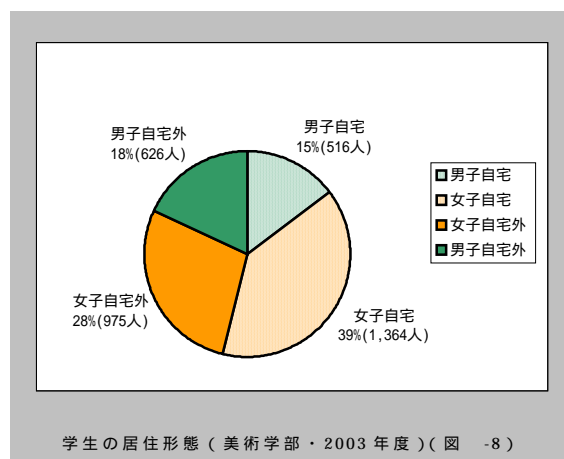
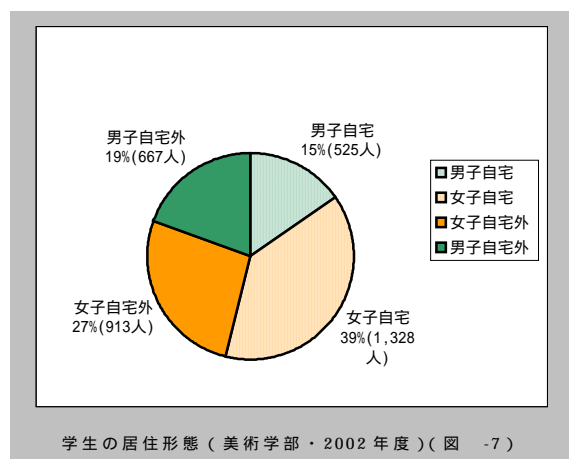
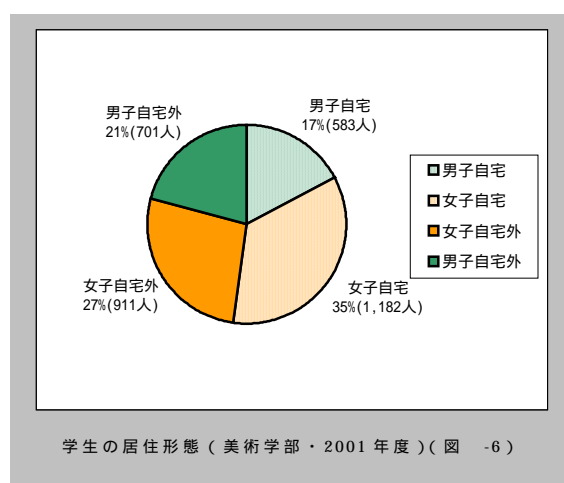
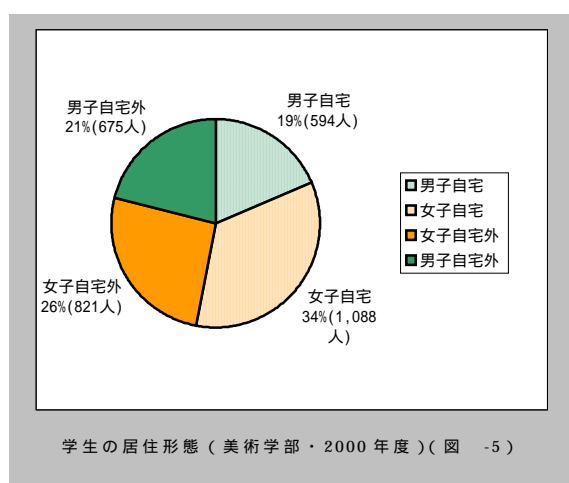
現在、留学生の在留資格に関する入国管理局への申請については、留学生個人が行っているが、2004年度からは「申請取次」(大学担当者が留学生のからの申請を審査し、とりまとめ、入国管理局に留学生に代わって提出すること)を行う準備を進めている。

卒業後の進路についても、大学が積極的に関わる必要がある。日本での就職を希望する留学生も増えており、就職支援についても、留学生とより緊密なコミュニケーションをとり、留学生が必要とする情報をもつ外部団体を紹介するといった支援も行いたい。

3 . 学生数の推移と居住形態の変化について

< 現状報告・評価 >

美術学部では、毎年女子学生数が増加している。全学生数に対する女子学生の割合も7割近くとなっている。女子学生の自宅通学率が高いことから、自宅通学学生の割合が増える傾向にある。

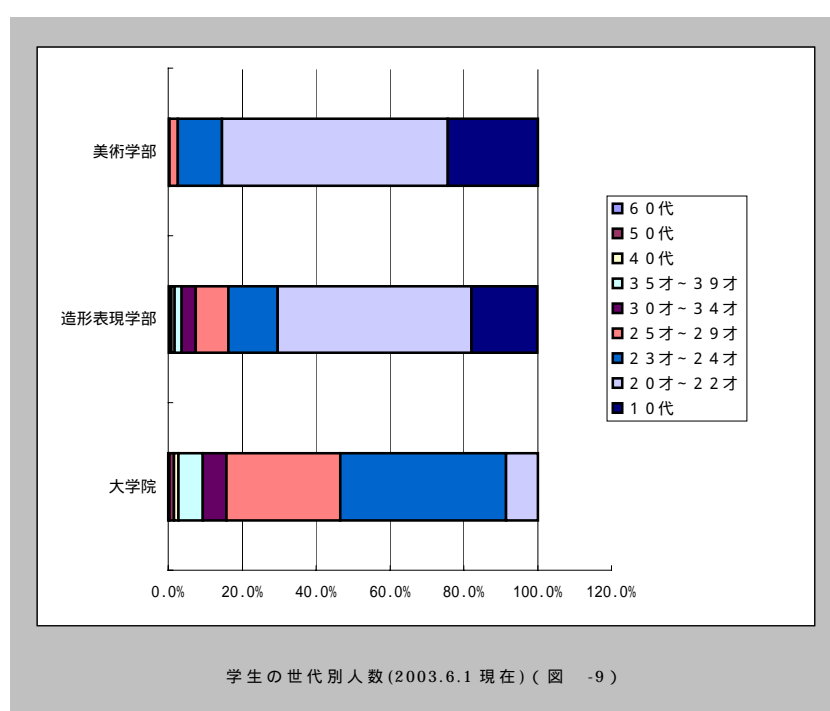


自宅外通学を希望する新生への住居紹介は、八王子キャンパスのみで行っている。2002年度入学生対象の住居紹介（2002年3月実施）までは、学生課が紹介する物件のみで行っていたが、2003年度入学生対象の住居紹介からは不動産業者（2社）と共同で住居紹介を行っている。

不動産業者へ依頼した理由は、大学付近から橋本駅方面をつなぐ久保ヶ谷戸トンネルの開通に伴い橋本駅方面へのアクセスが良くなり、学生の住居の希望も橋本方面が中心となって来たからである。大学での紹介物件の中心は大学近辺や八王子方面であり、学生のニーズに沿うことができなくなって来た。また、学生により多くの物件を比較検討してもらうためには、不動産業者に依頼した方が効率的である。

この2年間実施した業者紹介と、従来行ってきた大学紹介のみのどちらの方法が本学に適しているかは、もう少し実績を上げてからでないと比較はできない。

近年、学生の年齢分布も幅広くなっている。今後、入試制度の多様化等に伴い、高等学校を卒業して何年かの内に進学する学生だけでなく、一旦社会にでてから進学を希望する学生も増えて来ることが予想される。参考までに、2003年度時点の学生の年代別人数について掲載する。



< 課 題 >

大学として、新生に安全で快適な居住空間の情報を提供することは、今後も必要であろう。業者選定の方法や、実施時期について検討を重ねながら、より良い住居紹介を実施していきたい。また、多様化する学生に対応できるような学生支援の方法を検討する必要がある。

4 . 課外活動

< 現状報告・評価 >

クラブ・サークルについて

本学のクラブ・サークル団体は、八王子キャンパスのみに設置されている。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
(公認) 体育連合会	13	13	13	13
(公認) 文化連合会	18	19	19	19
未公認団体	7	7	8	5
合計団体数	38	39	40	37

クラブ・サークル団体数の推移(表 -3)

クラブ・サークル数については、大きな変化はない。未公認団体については、いくつかの団体が継続性を持って活動したのちにクラブ・サークルへ移行しているが、ほとんどが1年限りで活動が終わってしまうため、継続性のない団体が多い。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
(公認) 体育連合会	238	278	282	356
(公認) 文化連合会	602	654	548	565
未公認団体	88	62	119	68
合計人数	928	994	949	989
加入率 (合計人数/5月1日 付在籍学生数)	29.0%	29.3%	27.6%	28.4%

クラブ・サークル加入数・率の推移(種別)(表 -4)

クラブ・サークルへの加入学生についても、例年在籍者の約3割と、大きな変化はない。また、体育系クラブ・サークル、芸術祭実行委員会の事故防止意識向上のため、1991年度より「救急法講習会」を開催している。日本赤十字社の救急法講習会の本学での開催は、2003年度で12回を数える。

開催年度	講習会	日程	受講生	修了者	合格者
2000年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	7/17～19	25名	24名	24名
2001年度	東京消防庁 応急手当(上級救命)講習会	7/27	20名		
2002年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	7/22～24	38名	35名	34名
2003年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	9/2～4	42名	34名	34名

救急法講習会の開催状況(表 -5)

ボランティア活動について

・学外ボランティア

近年、学生課が窓口となって、学生が学外でボランティアを実施する機会が増えている。2003年度については、下記2カ所において、学生課が窓口となって、学生がボランティア活動を行った。

「精華祭」への参加（2003年10月25日 9:30～15:30開催）

知的障害者厚生施設「精華寮」(八王子市鎌水)の文化祭に本学より13名の学生が参加した(準備・運営協力2名、フラメンコ部(フラメンコ上演)6名、ジャンベ民族楽器部(楽器演奏)5名)。

なお、精華寮の方々には、11月の本学芸術祭の見学に来ていただき、交流が続いている。

「鎌水地域フェスタ」への参加（2003年11月8日 10:00～14:00開催）



(第二回鎌水地域フェスタでのフラメンコ部の公演風景)

地域交流と親睦、青少年の社会参加・貢献を目的とする第2回「鎌水地域フェスタ」に参加。八王子市立鎌水中学校を会場に、鎌水地域にある幼稚園、小学校、中学校、自治会等が参加する地域最大のイベントである。本学からの参加学生は、実行委員会との2ヶ月の打ち合わせを経て彫刻学科より作品展示(石彫、約10名参加)ならびに学生のクラブ等が出し物を披露した(3団体、38名:フラメンコ部15名、ジャンベ民族楽器部8名、和太鼓研究会15名)。

・学内ボランティア

1998年度より、学生課では、聴覚障害を持つ学生の授業・オリエンテーションに対して、ノートテイクボランティア等を派遣している。2000年度からの実施状況は以下の通りである。

	対象学生数	ノートテイク人数
2000年度	3	2
2001年度	3	3
2002年度	2	3
2003年度	1	7

ノートテイクボランティア実施状況(表 -6)

ノートテイク登録者数が年々増えているのは、前年度ノートテイクを行った学生が翌年度も継続してテイクを行うケースが多いことによる。

学生ボランティアの募集については、学内へのポスター掲示や、チラシの配布を行っている。ノートイクを利用する聴覚障害を持つ学生が、自分の友人を連れてくるケースもある。

< 課 題 >

近年の他大学における学生の自主的クラブ・サークル活動の様子を見ても、活性化している大学は国公立あわせて12.3パーセントと大変少ない。(「大学における学生生活の充実方策について」2000年6月14日文部省高等教育局) 本学においても、関連施設の充実をはかり、クラブ・サークルのさらなる発展を支援する必要がある。大学の支援体制についても、どのように取り組んでいくのか考えなければならない。

ボランティア活動については、大学としてその活動の基盤づくりをしなければならない。学生のボランティア活動をどのように支援していくのか、大学の姿勢を決めなければならない。

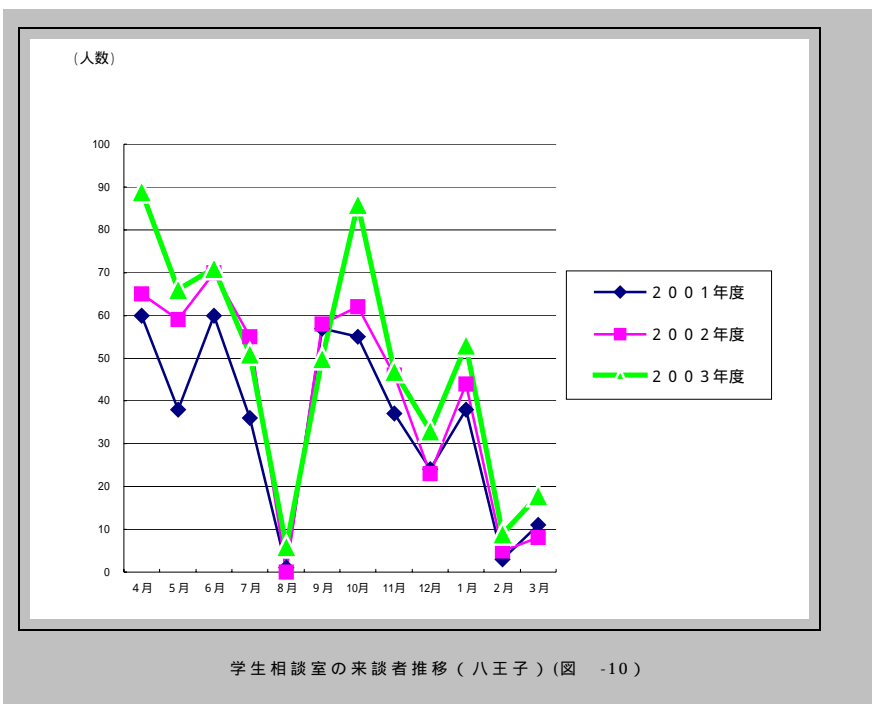
今後、現代社会に貢献する学生を育成していくためにも、地域との連携を視野に入れた学生の自主的行動を支援することが必要である。

5 . 学生相談室

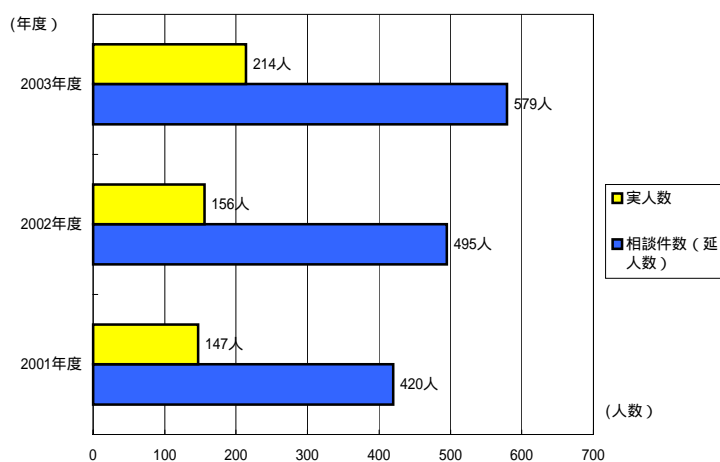
< 現状報告・評価 >

学生相談室は、大学教育の一環として学生個人が当面する諸種の問題について相談に応じ、助言指導をし、心身保健その他における問題の解決のため援助、指導を行い、学生生活の充実向上に協力することを目的として、2001年4月に開設された。

開設から2003年度までの八王子キャンパス学生相談室の利用状況については、以下の通りである。



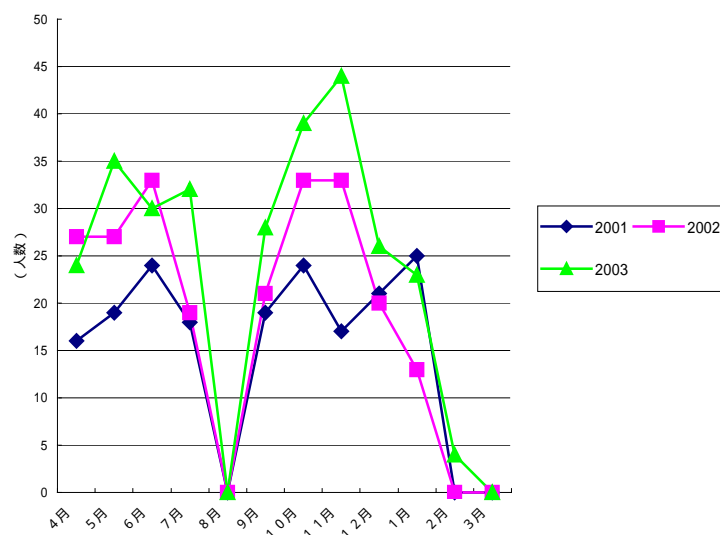
4月に相談件数が増えているのは、新入生からの相談が増加することによる。また、学生相談室で休学や退学に関する相談も受け付けているため、1月に相談件数が増加している。



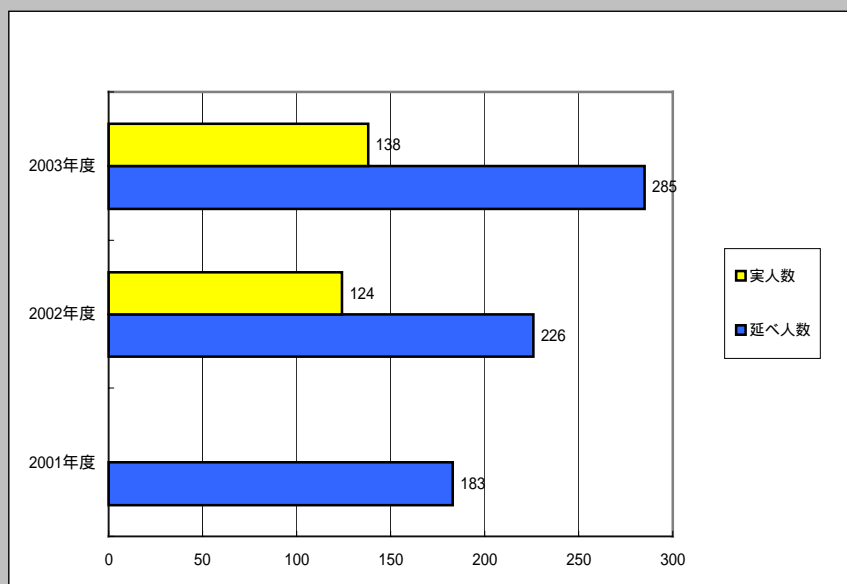
相談件数(延べ人数)と年間実人数・八王子(図 -11)

毎年学生相談室の利用は増加している。2001年度に比べて、2003年度は相談件数で約1.4倍、利用実人数で約1.5倍となっている。

上野毛キャンパス学生相談室の利用状況は、以下の通りである。



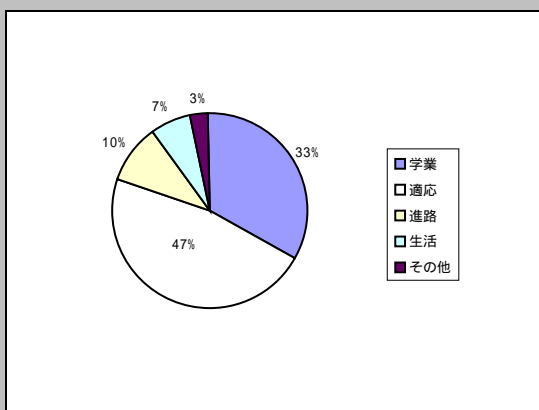
学生相談室の来談者推移(上野毛)(図 -12)



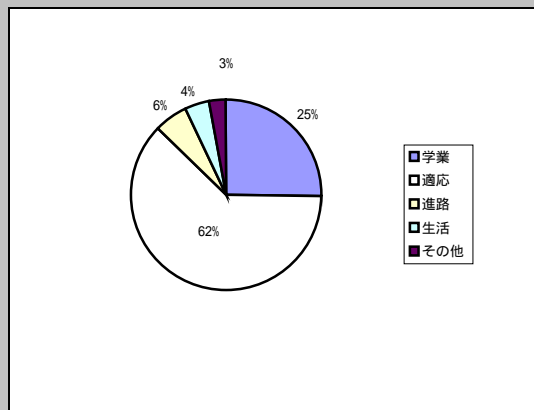
相談件数（遅べ人数）と年間実人数・上野毛(図 -13)

2001年度については、実人数のデータがないため非表示

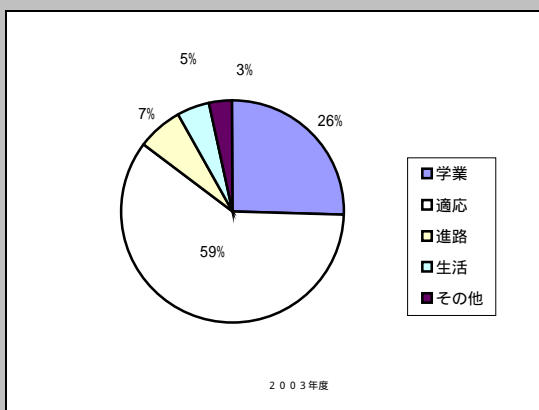
・相談内容構成率（八王子キャンパス）



相談内容構成率（2001年度八王子）(図 -14)



相談内容構成率（2002年度八王子）(図 -15)



相談内容構成率（2003年度八王子）(図 -16)

学業：履修、学業、退学、休学、転部、転学科
 適応：精神衛生、心理・性格、対人関係、クラブ活動、
 学生生活、サロン
 進路：進路、就職、留学
 生活：法律、家庭、家族、生活、経済、アルバイト
 その他：コンサルテーション、その他

学生相談室で受け付ける相談内容は、上記の通り多岐に渡っていることがわかる。

学生相談室では教職員対象の学内研修として、年1度の研修会を行っている。学生相談員だけでなく、実際に学生と接する機会の多い研究室の助手・副手や、教務課職員等の参加もある。

教職員対象学内研修

2000年3月6日 「学生相談の基本について」

講師 菅沼 賢治 氏 千葉商科大学専任カウンセラー

参加者 教職員 19名

2001年10月3日 「来談学生の傾向と事例検討」

講師 苫米地 憲昭 氏 国際基督教大学 カウンセリングセンター長 専任カウンセラー

参加者 教職員 20名

2002年10月16日 「事例検討」

講師 駒込 勝利 氏 山梨英和大学教授 臨床心理士 大学カウンセラー

参加者 教職員 25名

2003年10月22日 「学内の連携による学生援助」

講師 伊集院 清一 氏 本学教授 精神科医 臨床心理士

参加者 教職員 約40名

< 課題 >

学生相談室への来室方法としては、学生の自発的な相談を待つことも重要であるが、実際に学生と接する機会の多い研究室からの情報を得て、学生相談での学生支援につなげることも必要になる。より一層研究室との連携が重要になる。

今後も多様な学生が入学してくることを鑑みると、大学カウンセラーの果たす役割は増加することが考えられる。

なお、現在学生相談室では年報の発行を予定している。利用状況の詳細については、年報の発行を待ちたい。

6 . 保健室

< 現状報告・評価 >

例年 4 月に実施する健康診断の受診率については、毎年 90% 程度の学生が受診している。

	2000 年度		2001 年度		2002 年度		2003 年度	
	受診人数	受診率	受診人数	受診率	受診人数	受診率	受診人数	受診率
美術学部 1 年生	837	94%	861	98%	856	99%	859	98%
美術学部 2 年生	812	93%	809	91%	819	95%	844	97%
美術学部 3 年生	755	93%	783	94%	808	93%	830	96%
美術学部 4 年生	624	93%	747	93%	794	96%	822	96%
造形表現学部 1 年生	222	88%	232	92%	205	86%	228	93%
造形表現学部 2 年生	173	75%	191	78%	206	80%	181	80%
造形表現学部 3 年生	130	67%	169	76%	189	81%	184	73%
造形表現学部 4 年生	152	84%	154	80%	183	81%	210	85%
大学院生	193	92%	192	89%	240	95%	240	97%
研究生	17	77%	23	82%	17	94%	17	100%
合 計	3,915	86%	4,161	87%	4,327	90%	4,425	92%

健康診断の受診状況 (表 -7)

大学の正規の授業や、公認の課外活動（教育研究活動）中に生じた急激かつ偶然な外来の事故によって身体に傷害を被った場合に申請できる学生教育研究災害傷害保険(学研災)については、例年同じ時期に申請件数が増える傾向にある。事務手続きに関しては、学生課ならびに造形表現学部事務部において取り扱っている。

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
八王子キャンパス												
2000 年度	0	0	3	0	0	0	3	2	0	0	0	0
2001 年度	2	1	4	0	1	0	2	1	3	1	0	0
2002 年度	2	0	4	1	0	1	1	1	2	0	0	0
2003 年度	2	0	4	0	0	2	3	3	2	1	1	0
上野毛キャンパス												
2000 年度	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2001 年度	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0
2002 年度	0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0
2003 年度	2	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0

学研災保険適用者数 (表 -8)

< 課 題 >

保健室の業務の主となるのが、学生健康診断ならびにその事後指導である。健康診断受診指導については、学内での周知も徐々にはかれ、受診率も高い。学業を維持していくための健康指導と、工具の使用等に伴う制作におけるケガの防止策を保健室から発信していくことが今後の課題となる。また、保健室利用状況についても八王子・上野毛の両キャンパス共通の条件でデータをそろえ、検討する必要がある。

八王子キャンパスについては、留学生に対する医療費補助申請の業務も、今後留学生が増加することでさらに負担が増える。今後、大学規模の増大や、学生の多様化に対応するためにも、保健室のスタッフ数の増加についても視野に入れる必要がある。

7. 進路選択への指導について

進路・就職指導とは、学生ひとりひとりの希望とその能力や適性に応じた進路や職業を選択させるための「教育と指導」である。そして進路・就職指導を進めるには、「カウンセリング」が重要な役割を果たしている。

< 現状報告・評価 >

集团的学生支援の対策（学生全体への支援）

* 各種ガイダンスの概要（延べ実施回数）

職業指導の一環として、毎年10月以降に「進路・就職のためのガイダンス」を実施。内容は、進路全般から就職に特化したものまで多岐にわたっている。

また、学科別にも行われ、各専攻学科に応じたきめ細かい指導により対応している。

ガイダンス・講座		2001年度		2002年度		2003年度	
		八王子	上野毛	八王子	上野毛	八王子	上野毛
10月	進路・就職ガイダンス	3	0	3	0	4	2
	就職登録説明会	0	0	0	0	2	2
11月	進路・就職ガイダンス	2	2	2	1	0	0
	就職登録説明会	3	2	1	1	1	0
	進路・学科別ガイダンス	10	0	11	0	11	0
	就職講座	1	2	1	1	2	3
12月	就職講座	2	1	2	2	1	0
	進路ガイダンス	0	0	1	0	1	0
翌年1月	就職説明会	1	1	1	1	1	1
翌年4月	進路説明会	1	1	1	1	1	1

就職ガイダンスの実績（表 -9）

就職講座は、「自己分析」、「エントリーシートの書き方」、「OB訪問の仕方と業界研究」などを取り上げており、翌年の卒業年次を迎えた年にも、就職ならびに進路の説明会を実施して万全のフォロー体制を敷いている。なお、年々実施時期が早まる傾向にあるの

で、今後その対応が必要である。

個別的な学生支援の対策（学生ひとりひとりへの支援）

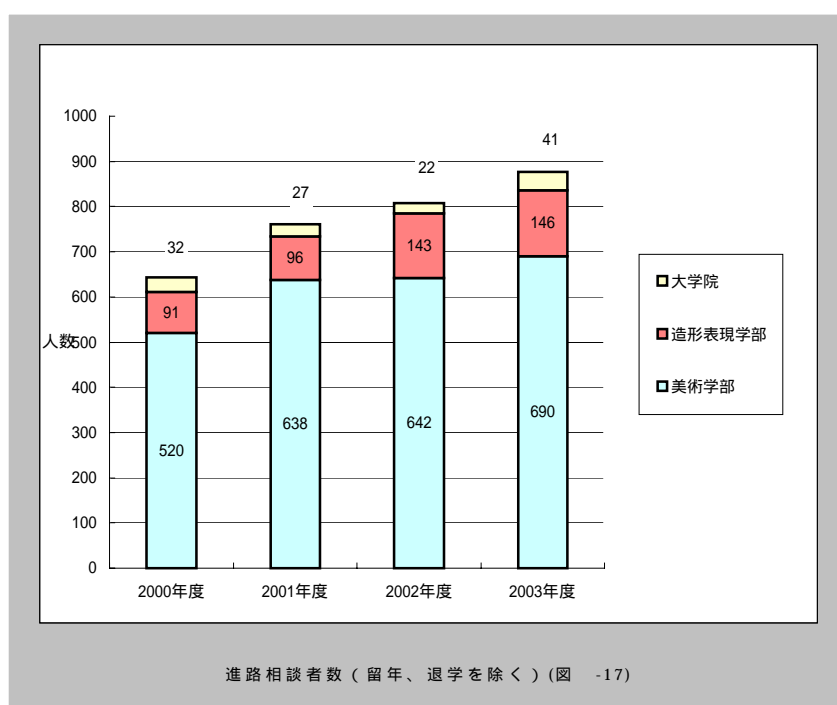
* 進路相談受付け数の増大傾向

毎年、就職のみならず進学や留学などを含めた「進路相談」の受付人数も、学生数の増加に伴い、増える傾向にある。これは各学部全体（大学院を含む）にみられる傾向である。一方では、企業側としても「学生のより高度な質とより深い能力」を厳しく見極めていともいえる。見方を変えれば、大学の教育レベルを評価されるものであり、学生生活についても問われるものである。

多様な雇用形態や目的意識に対応した相談も増えつつあり、上野毛キャンパスの就職資料室を活用し、就職相談員を配備して造形表現学部の進路・就職相談にも応じる体制をとっている。さらに、求人情報などの「インターネット掲示板」の利用も始まり、休暇期間中などのフォローにも役立っている。

また、OBとのパイプの強さも本学の特色のひとつといえる。

現在、本学OBが関連する企業先数は1,371件（2004年5月現在）あるが、これも今後のOB交流会などの有力な「資源」として捉えていきたい。



< 課 題 >

まず、進路・就職指導について具体的に提言していきたい。そこで3つの視点からそのポイントを述べたい。

1. 職業教育・職業講座などの充実

現在「進路・就職ガイダンス」が始まるのは、3年生（院1年生）の10月頃となっているが、この時期をもう少し早めていきたい。そのために教員側の理解と協力も必要となる。

併せて、将来へ向けたキャリア形成のための指導（ガイダンス）や基礎的なパソコン教育などを組み入れたものとして充実させたい。

これらは、「進路・就職」を早い時期から動機づけるためにも必要であり、パソコン教育については、ファイナート（絵画、彫刻、工芸）系の学生にも積極的に取り組みさせていきたい。

企業側からの声としても、プレゼンテーション能力に対する期待は高いものがある。ポートフォリオの作り方を含めた「プレゼン講座」などの実施も検討したい。これらは、自己の能力をきちんと相手に伝える訓練として必要であり、実社会において求められる重要な要素でもある。その意味では、実践型の対応をはかっていきたい。教育上のスキルとして授業内で解決するか、あるいは就職支援として大学全体での取り組みにするかは検討を要するところでもある。

素質ある本学学生の潜在力を十分に開花させるためにも、必要な課題といえる。

2. 教職員の連携強化

就職指導委員との連携も含め、就職担当セクションと各学科（専攻）との双方向での協力体制を構築していく。また、随時適切なデータリサーチを実施し、現状の分析と併せ、要望などの吸い上げにも努めていきたい。

3. カウンセリングの充実化

本来、カウンセリングには3つの要素がある。

プレイスメントカウンセリング（就職相談）、ボケイショナルカウンセリング（職業相談）、キャリアカウンセリング（進路相談）である。就職指導を進めるにあたって、これらのカウンセリングが最も重要な役割を果たしている。従って、学生との対応においては、これらカウンセリングの状況に応じた使い分けが必要であり、その技術を磨いて質的向上をはかることが重要である。

以上より、これらの課題を克服していくうえで、2つのキャンパスを擁する本学としては、その一元化と相互間の温度差を解消していくことが前提であり、このテーマはまだ途上ながらも着実に前進していると言えよう。

また、本学が輩出した多くのOB達に支えられ、これらOBとの紐帯強化のもとにそのパイプの太さという強味を発揮しながら、これからも特色ある多摩美術大学を形成していきたい。

§おわりに§

これまで学生支援全般について述べて来たが、ここで「今後の方針と考え方」を、以下の3点に要約したい。

まず今日の多様化する価値観の中で、学生の“生の声”を吸い上げてそのニーズを的確に捉え、問題の所在を明確にし、具体的に応えていくことが肝要である。大学からの支援も一方通行ではなく、学生のニーズを視野に入れた双方向のものとしたい。

そのためには、随時アンケートなどを実施して具体的な回答を提示していききたい。これは学生に安易に迎合するという意味ではなく、学生と対等に対峙し“コミュニケーション”していくことを通じて、大学と学生が同じ目線でものを考える力が、これからの大学にはますます必要とされているからである。

次に、学生支援の窓口である学生部や造形表現学部事務部をどのように利用していくかを常に懇懇しながら、日頃から学生達に問いかけていくことである。アンケートなどで実態を把握して、できるだけ多くの学生に対し、窓口部署に“目と足”を向けさせることが肝要である。

そのための施策と窓口部署の利用価値を高めることが、これからは一層重要とされて来る。

併せて、卒業生の追跡調査など卒業後の動向も視野に入れ、今後の課題として検討していきたい。

最後に、これらの視点を通じて、社会の変化や多様な価値観に対応した柔軟な組織づくりが必要とされる。これは大学全体として取り組むべきテーマではあるが、将来的には学生支援の方法も、大学組織の諸制度やその展開の中で徐々に変化していくものと思われる。

従って学生のみならず、大学や社会のニーズなどへの鋭敏な対応を視野に入れていくことも重要である。

学生支援で望まれることは、学生自らが目的を持って学生生活を送り、自分の専門性を高めて自分自身のライフワークを考え、自らの力で将来への道筋をつけられるように指導・支援していくことである。学生が大学で何を学び、そこから何を得て何ができるか、そして将来の希望について自信をもって語れるように、大学教育における学生支援のあるべき姿を確立していく努力こそが、いま本学に求められているとも言えよう。